

Unit7 Developing Countries		由井 史子 神奈川県立ひばりが丘高等学校
◆担当教科：英語	◆実践教科：外国事情（教科書：You, Me, and the World [金星堂]）	
◆時間数：10 時間	◆対象学年：高校 3 年(国際教養コース)	◆対象人数：38 名

カリキュラム

<実践の目的>

- 開発問題について議論・プレゼンテーションを英語でおこなうために必要な語彙を習得する。
- 発展途上国が抱える複雑な問題に関する知識を深めるとともに、国際協力活動の意義を学ぶ。
- 疑似体験授業により日本と発展途上国の格差を実感することで、自分たちが支援をするべき立場にいることを知り、積極的に国際支援に関わっていこうという意識を育てる。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	教材
1	「私が見たウガンダ」 ねらい：発展途上国であるウガンダの生活や学校の様子、文化を紹介するとともに、わたしたちが一般的に抱くアフリカのイメージとの違いを示す。	(1) 訪問地 (2) 食べ物・水・トイレなど (3) 交流活動での子どもたちの様子 (4) ダンスや民族衣装など	パワーポイントによるプレゼンテーション
2 3	「100 人村ワークショップ」 (2クラス合同約 80 人・国際関係史とのコラボレーション授業) ねらい：先進国と発展途上国との格差、非識字の恐ろしさを体験させる。	マニュアルにしたがってシミュレーションを行なう。 (参考資料)	マニュアルで指示された教具・教材 ワイヤレスマイク ふりかえりシート
4	Vocabulary Check & ③ Reading ねらい：Unit 7で扱う語彙を確認し、発音できるようにする。③ Reading を読んで、英語による発展途上国の定義を理解させる。	(1) 単語の意味確認 (2) 発音練習 (3) テキストの音読 (4) テキストの内容理解問題 (34 ページ)	教科書と補助プリント
5	⑤ Reading and Sharing ねらい：発展途上国に共通する主な問題について考えさせる。	(1) テキストの音読 (2) 原因と解決策の表の作成 (36-37 ページ)	教科書と補助プリント
6	⑤ Reading and Sharing & ⑥ Listening ねらい：発展途上国の問題が国際協力によって解決可能であることに気づかせ、国際協力の一例として World Concern の活動について聞き取りをおこなう。	(1) 表の完成 (36-37 ページ) (2) テープを聴き、問題 (37 ページ) に答える。	教科書と補助プリント
7	⑧ Critical Thinking & ⑪ Vocabulary	(1) 問題 (38-39 ページ) に答える。	教科書

	ねらい：事実と意見、正しい情報と間違った情報、「よい」と「悪い」の判断について考えさせる。また、Unit 7 で学んだ語彙をもう一度復習させる。	(2) クイズ (40-41 ページ) に答える。	
8	「海外青年協力隊員と専門員のはたらき」 ねらい：実際に日本がおこなっている国際協力について紹介する。	ウガンダで会った隊員・専門員の活動とコメントを紹介する。	パワーポイントによるプレゼンテーション
9 10	「新貿易ゲーム」 (国際関係史とのコラボレーション授業) ねらい：国家間の格差がどのように広がるかを体験させ、国際協力の重要性を認識させる。	マニュアルにしたがってゲームを行なう。(参考資料)	マニュアルで指示された教具・教材 ふりかえりシート

授業の詳細

【1時限目】「私が見たウガンダ」

プレゼンテーションの内容

- ウガンダが多民族国家であり、多数の現地語がある。公用語が英語である。
- 赤道直下であるが、年平均気温が 22 度の温暖な気候であり、緑が豊かな国である。(参考資料①)
- 主食、水、トイレなど。保健衛生に関する問題。(参考資料②③)
- 平均寿命・5 歳未満死亡率・出生率などを日本と比較。AIDS 問題。
- 校舎や教具には恵まれていないが、勉強熱心な生徒が多い様子。(参考資料④)
- 「世界に一つだけの花」や「ソーラン節」など、日本の歌や踊りでの交流の様子。(参考資料⑤)
- ウガンダの民族衣装やダンスの紹介 (参考資料⑥)

プレゼンテーション(抜粋)



資料①



資料②



資料③



資料④



資料⑤



資料⑥

生徒の感想

- 日本とウガンダの生活がまったく違うことがわかった。例えば、食事は食物繊維が豊富なバナナなどで、水も飲むためには濾さなければならないこと。トイレやお風呂も自分で水を汲んでこなければいけないことなど。実際、発展途上国がどんなに大変な生活をしているのかわかった。
- くつをはいていない子もいる中、悲しい顔やつまんなような顔をする子は1人もいず、みんな笑顔で学校生活を送っていた。教室では、後ろの席のほうの子は黒板からとても遠くて、不便そうなのにも関わらず、真剣に授業を聞いていた。日本にいて、とても良い環境のわたしたちが勉強だるいとか学校めんどうだとかいってるのがとても恥だと思った。ウガンダの子はみんな学校でいきいきしていた。ウガンダの子どもたちが日本人のまねをして、ソーラン節を踊っている姿がとてもかわいかった。
- 生徒たちをみて、みんな勉強をするのが好きなんだなって思った。みんなすごい楽しそうな顔をしてた。「世界に一つだけの花」を歌ったり、ソーラン節を踊っているのを見て、なんかうれしい気持ちになった。
- 先生のウガンダの学校の様子ビデオを見たり、話を聞いたりして、日本の学校とはまったく違うことに驚きました。授業は古びて使いにくそうな黒板に、小さな薄暗い教室で、たくさんの子どもたちが目を輝かせて集中していました。日本の場合は環境が良いためか、明るい教室での授業ですが、ウガンダの学校は明るくするものがなくても子どもたちのやる気とハイテンションで十分明るく見えました。

- ウガンダのビデオを見た後に、自分のカンボジアの学校生活を思い出しました。ウガンダほど貧しくはないが、共通点があります。例えば音楽、体育などの教科はあまり大切でないとわれ、生徒には5教科を中心に勉強させました。しかし、日本に来てからそうではないと分かりました。なぜなら、社会の中で生きていくために芸術などの知識も身につけていかないといけないと思います。

【2, 3時限目】「100 人村ワークショップ」

活動の内容

- 世界は今、高齢化？若年化？
- 世界の人口
- 世界の言葉で「こんにちは」
- 大陸ごとに分かれてみよう！
- 字が読めないということ
- 世界の富は誰が持っているの？

生徒の感想

- 今まで聞いてきた数字が、実際にはどのような状態なのか理解できました。
- 授業のプリントだけではピンとこなかったが、人のかたまりを見て「こんなに違うのか」と実感した。
- わたしは、この生活が普通だと思っていたから、とてもビックリした。
- 字が読めないことがすごく不便だとわかった。
- 言語がわからないと命にかかわるとわかった。
- 北半球にも字が読めない人がいるとは驚きです。
- 今日の私の役割は成人の男の人なのに字が読めない人だったので驚きました。
- ジュースを分けた時、中間層グループだったにもかかわらず、量が少なかったのが驚いた。
- 私は貧しいアジアの役割だったけど、ジュースの量を見たときにひもじくなりました。
- ジュースを分けているとき、あまりに少なくて、たかがジュースなのに悲しくなりました。
- 中間層グループの私でも罪悪感がありました。
- 豊かな国がチョコを分けてくれたのがすごくうれしかったです。このように、私たちのような豊かな国の人が現状を知り行動を起こせば、今よりましな良い世界になると思います。
- 世界には全員に分け与えられる食料があることがわかり、自分たちの生活を見直す必要を感じた。
- シャンパン型の世界から、紙コップ型の世界に変わればいいな、と思いました。
- シャンパン型が湯飲み茶碗型になってほしいです。

【4～7時限目】

Reading and Sharing で取り上げる、発展途上国に共通する問題6つは、① hunger ② disease ③ illiteracy ④ unemployment ⑤ homelessness ⑥ debt である。英文から原因と解決策を読み取らせることで、開発問題に関する語彙を習得させるとともに、どの問題も長期的な国際支援によってのみ解決可能であることに気づかせる。Listening では実在する団体、World Concern の Charity Dinner の目的を聞き取らせる。また、Critical Thinking で扱う文は、“Bangladesh is a developing country.” (Fact) “Bengalis are friendly people.” (Opinion) “Some multinational corporations are richer than many countries.” (True) “More and more Chinese families are buying refrigerators.” (Good for Chinese families, but bad for the global environment.)

など。

【8時限目】「海外青年協力隊員と専門員のはたらき」

プレゼンテーションの内容

現地で取材した13人の隊員・専門員のコメントを、①課題 ②目標に分けて紹介した。
(参考資料はそのうちの4人)



- ・ 問題
まっすぐ線を引いたり、きちんと紙を折ったりできない。
耳が聞こえないので、指導は健常者以上に困難。
- ・ 目標
生徒たちの学力・技術力を健常者のレベルに引き上げる。



- ・ 問題
土地が固くて作物が育たない。
 - ・ 目標
毎日の姿を村の人に見てもらいたい。耕すことで、作物でなくても何か残せればいい。
- 開発とは、何もないところから何かを生み出すこと。



- ・ 問題
時間が守れない。ゴミをちらかす。言い訳をする。ひとのせいにする。
 - ・ 目標
野球を通じて礼節を教える。
- ウガンダの子は20点しか持っていないが、80点分努力の余地がある。



- ・ 問題
医療機器が先進国から寄付されても、フォローアップがない。
→壊れたら修理する部品がない。
- ・ 目標
機器を壊さないよう正しく使う指導をする。

生徒の感想

- 自分が思っていたより多くの日本人がウガンダでボランティアとして働いている人がいるのに驚きを感じた。海外で人のために働いている人はとてもカッコイイと思った。
- どのボランティアの人たちも自分たちのことを考えるのではなくウガンダの人々のことを優先して考えていて、さらに自分のポリシーや目標を持っていて、それを糧にしながら行動しているからカッコイイし、素敵だと思った。
- 体育が子どもたちに喜ばれないというのが1番驚きました。体育は学校という施設や教科書などがなくても広い場所があればできるし、体を動かすことは、私たち日本人の学生と同じように好まれるのだ、と思っていました。でも、ボランティアの人の熱心な働きかけで、野球なども広まったみたいで、自分の体と場所があればできる楽しいことが1つ、ウガンダの子どもたちに増えたんだと思うと、私も嬉しいです。
- 先進国でもある日本からこういうボランティアの人たちが援助しに行くことは同じ日本人として誇りに思うべきことだし、もっとたくさんの国へ行こう！と思う人が増えればいいのと思った。募金とかそういう小さなことからでも助けられる人がいるんだから、自分もどんどん実践していかなきゃいけないと思った。
- 遠い国に行って人々を助けていて尊敬します。そして、その村、国を活性化させるのには、とても長い時間がかかるんだということを知りました。その村、国が活性化するには、ボランティアの力はもちろん必要ですが、現地の人、それぞれがきちんと技術を学び、自分たちの力で行動していかなければ成果がないのだと思いました。

【9, 10 時限目】「新貿易ゲーム」

活動の内容

- グループ分け・ルールの説明・開始
- 製品の価格が下落
- 途上国への技術援助
- 新たな資源の発見
- 新しい企画の発表
- IT革命
- フェアトレード

生徒の感想

- 資源があっても、それで何かを作るための情報や道具がないと、結局お金が稼げないことがわかった。
- 私のグループは、道具はあったけど、資源がなかったので、苦勞した。先進国が資源のある国を植民地にした理由がわかる気がした。
- いつも世界の国々が協力し合えばいいのに、と思っていましたが、今回このゲームをしている間は闘争心が燃えていて、みんなで協力して平等に利益を得ようという考えは出てこなかった。それが現状だと思った。
- 100ドルでコンパスをレンタルしたとき、「もういらない。」と言われ、先進国は口だけなんだ、と思った。交換にもなかなか応じてくれず、先進国はずるいと思った。結局、先進国は自分の国のことしか考えていなくて、日本もそうだとしたら情けない。
- いつも交換条件とか厳しいのをつきつけられ、先進国はずるいしケチだと思った。
- Yちゃんのグループは最初クリップ1個(100ドル)でコンパスをくれたのに、Yちゃんのグループも他のグループもお金がどんどん増えるとケチになった。
- 途中、勝つことで頭の中がいっぱいになってた。ゲームだから楽しかったけど、実際に世界で起きていることだと思うと怖い。戦争が起こるのもわかる気がした。
- わたしたちの班は頭を使わなかったので出遅れたけれど、もともとお金をもっていたので最後はお金を稼ぐことができました。やっぱり発展途上国の人が、先進国と同じ努力をしただけではダメなんだとわかりました。
- Mさんの班は、うちの班が分度器をあげてから、素晴らしい勢いで発展した。まるでアメリカだ。
- 発展途上国を助けなきゃと思っているのに、実際にゲームをしてみたら、自国をもっと成長させたい、他の国に負けたくない、と思った。
- 私は道具が豊富な国だったので、他国から取り引きの誘いが多かった。実際、先進国はこういう状態で、貧しい国を相手にいかに自国の利益を増やすかということを考えていることがわかりました。
- モノカルチャー経済が不安定な理由がわかった。
- 情報操作は恐ろしいと思った。
- 最初は紙1枚とクリップ1個(100ドル)しかなくて、まわりのどこにも交渉を断られて、どうしようかと思った。NGOのおかげで最後にお金を貯めることができた。世界にはこんなふうな誰かの助けによって救われる国が本当にあると思う。
- ゲームの後に先生が、発展して儲けた国の机が一番汚いのはそれだけ廃棄物を出しているからだ、ということと、私たちともう1つの班にツルを折ることでお金をくれたのはNGOだ、ということを教えてもらって、今まで授業で習ったことが理解できた。
- 9cmの三角形を作っていたら11cmに変わっちゃって、すごくがっかりした。先生が後で話してくれた「日本のナタデココ・boomとフィリピン」の話はすごく共感できた。
- 私はマーケットでしたが、値段が上がると、それを売りに来る人が多くなったりして、株をやっているみたいだった。
- 国連って大事なんだ、と思った。他のグループともっと協力したら、みんなにもっとお金が入るかな、と思った。

成果と課題

外国事情は国際教養コース3年の3単位必修科目で、1 学期に環境問題、2 学期に開発問題を中心とする英語の授業である。今年度、2学期はこの Unit 7 Developing Countries の後、Human Rights, Peace and Conflict, Refugees, それに Landmines, Fair Trade を主なテーマとして扱った。2学期の導入部で、発展途上国ウガンダの様子と協力隊の活動を写真で紹介できたため、それぞれのテーマにおいても現実に行っている問題について確かなイメージを持たせることができ、生徒が自分とつながりがある問題として捉えさせることができたと思う。

反省点は、ウガンダが英語を公用語とする国であるにもかかわらず、現地で授業に使えるような英語の教材が入手できなかったため、実物教材を授業に持ち込めなかったことである。しかし、2度のプレゼンテーションと2度の疑似体験授業は教科書の内容理解を深めるのに十分効果的であり、今後も授業内容に即した教材として写真やビデオを役立てていきたい。

なお、1 月に全生徒がそれぞれ自分で設定したテーマについて英語でのプレゼンテーションを行ない、1 年間のまとめとする。

参考資料

- 新・ワークショップ版 世界がもし 100 人の村だったら（開発教育協会）
- 開発教育教材シリーズ④ 新・貿易ゲーム(開発教育協議会・神奈川県国際交流協会)

